



「人生」

社会学部 2年
丸山丈二

「人生って思い通りにいかないなあ。」と、最近特に感じる。自分の好きなこと、自分の好きな人など、自分の好きなものはどんどん遠くに行ってしまう。よくある自己啓発本で、好きなことだけやればいい、それだけで生きていけると書いてある。あのようなのを見ると虫唾がはしる。生きていくのは、そんなに簡単で、単純なものではない。

私は、自己主張が苦手だ。いつも周りに合わせて生きてきた。それでいいと思っていたが、先日、ある友人から「おまえて、何をしているのが一番楽しいの?」と聞かれた。その一言で、私の人生が全否定されたような気がした。いつも、空気を読み、楽しくないことを楽しいと言い、楽しいことを楽しくないと言って生きてきた自分の人生。

いったい、他の人々は、どのようにして自己主張をしているのだろうか。私と話す時だけ、自己主張をしているのか、それとも、お互い自己主張をしていないのか。どちらにせよ、生きづらい世の中だなと思う。もっと多くの人が、多様な人が生きていくことに理解を示してくれたらもっと楽に生きていけるのに。

と、私が考えたのは、二年の春のゼミ選びで、厳しいが、活発な議論をしている、いわゆる「ガチ」ゼミを選んだためだ。そこでは、私と違いみなさん非常に優秀で、自分の言いたいことをズバツと言えていると感じた。そのため、私も自己主張していかなければ、私抜きの議論が成立してしまうような環境だ。自己主張が苦手な自分を変えられるのではないかとこの環境を選んだ。まるで、苦いが体に良く効く特効薬のようなものだ、当時は考えていた。自分としては、今まで通り楽に生きていきたいが、それでは、なにも変わらないというはざまて悩み、この環境を選んだ。

しかし、本当にこれでよかったのだろうか、最近よくそう思う。空気を読み、自己主張ができないこと、周りに合わせてしまうことは、本当に個性がないのだろうか。私は、それも個性の一つなのではないかと思う。なぜなら、そのゼミに入ってしまったら、自分も、議論の最中に自己主張をできるようになったからだ。これは、私がいつも相手に合わせてきた対象が、ゼミに大量にいる自己主張を活発にする人になったからではないか。さながら、カメレオンのようだ。いや、怪盗21面相といった方がいいか。つまり、本質的には、おそらくなにも変わっていないのではないか。

当初、予定していた目標からは大分、逸脱してしまっただけ、こう考えると、人生は、どうやって生きていっても人それぞれに個性があるし、一人一人違うのだと私は思う。だからこそ、面白いとも思った。だから、私は、これから周りに合わせて、空気を読んで生きていくし、それが、私の個性だと思いたい。そして、多くの人間関係に悩んでいる人は、この本質に気づいて欲しい。あなたにも、人とは全く違った才能があるし、個性もある。ほかの人も同様だ。だから、あなたは、自分の人生だけを歩けばいい。ほかの人の人生を歩くことは、そもそも出来ないのだから。と考えるようになると、最初の自己啓発の言葉が腑に落ちて、こいつ良いこと言うなと思えるようになった。



「私の三つの経験」

経済学部 2年
神谷一慶

倫理学の講義で、マイケル・サンデルについて触れた。有名な倫理学者だ。「これからの『正義』の話をしよう」と題された彼の本は、今でも大書店に行けば必ず売っている。

サンデルは正義の基準として、幸福、自由、美德の3つの観点を挙げた。中でも、自分の思想をリバタリアンと分析する私にとって、自由の項目は共感できる思想が目白押しで、実に月並みな表現だが面白かった。

さておき、私はサンデルがあげた正義の基準の中で、「自由」が多様性を許容する鍵だと思っている。倫理学の教授は、「自由」の土台は「他者危害排除の原則」にあると言っていた。簡単に言えば、迷惑が掛からなければ踏み込まないし、踏み込ませないというものだ。

多様性の受容と言えば聞こえがいいが、要するに禁忌の許容だ。自分の文化ではありえないことを目の前でやられたとき、全く抵抗感を抱かないというのは無理がある。しかし抵抗感を抱いたとしても、「自分は迷惑を被ってないから。」と思考が推移すれば、抵抗感以上の炎症は起こらない。そう思った。

この講義があったのは去年の10月ごろだったのだろうか。同じ頃、私は中国語の教授と仲良くなった。教授は中国の出身で、日本にいれば当然マイノリティである。

教授がライフワークにしている、日中戦争の研究の手伝いをして、代わりにしばしば飯を奢ってもらった。学年が上がって中国語の担当は別の教授になったが、今年も手伝いを続けている。

それまで、私が中国人に対して抱く印象はいいものではなかった。無礼で、騒がしくて、意地汚いイメージが先行していた。しかし、実際関わってみると、日本人とは異なるだけで彼らなりの尺度があり、義理があった。

例えば年長者が飯を奢るとなれば驚くほど気前よく奢り、約束を反故にされたことは一度もない。尊敬すべき相手には然るべく敬意を払うことにも気づいた。ならば中国人全員こうかということ必ずしもそううまくはいかないが、私が中国人に対して抱くイメージは大幅に改善された。

教授と仲良くなるためには、初めて中国人の友達ができるまで私の中国人観は以前のままだっただろう。

これもまた同じ頃、去年の学園祭で、私は怒っている男を見た。彼は留学生と喧嘩でもしたのだろうか、「母国に帰れ!」と叫んでいた。かなりリベラルな空気の濃い法政大学の学生でも怒ってなりふり構わなくなればこれなのだから、世間一般なら言うまでもあるまい。

確かに、多様性はひずみを生む。それが亀裂を生じて、軋轢を生じて、争いに発展していくのだと思う。これは時代を超えて変わらないが、それでも今は啓蒙と発展によって多様性を受け入れる準備ができつつある。

マイノリティを拒まなければやっていけない時代ではないのだ。

もし自分が多様性を受け入れられないと感じるのなら、実際に関わってみることと、迷惑が掛からないなら許すこと。まずそれから始めればよい。

腹を括って、知って、それから時代に乗る。きつと受け入れることも、入り込むことも、そんなに難しいことじゃないはずだから。



「講義を楽しむ」

経営学部 4年
上崎柚華

私は法政大学に入学してから4年間、様々な教室で講義を受けてきた。それなりに真面目に学校に通っているため、いろんな講義の空気感を肌で感じた自負がある。今回は教室や受講人数によって違うそれについて、私が抱いた感想を綴ってこうと思う。

まず記憶に新しいのは、大教室で行われる経営学部の専門科目の講義だ。経営学部は学生数が多いことが関係しているのか、比較的外濠校舎や富士見ゲートの大教室の講義が多い。しかし、実際の受講人数は講義によって様々である。その中でも私が気に入っているのは人数の少ない講義である。

私は正直講義中に自ら発言するなどの、注目されることは得意ではない。そのため小さな教室に詰め込まれると圧迫感を感じてしまい、のびのびと教授の話を聞けなくなってしまう。また、受講人数が多いとざわざわとして落ち着かず、これまた静かに聴きたい私にとっては少しの不満が生じる。そこでこの大教室で人数が少なめ、という講義が私にとっては最高である。

実際のところ、講義中も教授とはかなりアイコンタクトを取ることができ、質問もとてもしやすい。学生同士も最初は全くの赤の他人であったのが、だんだん顔を覚えて「この人いつもこの席だな」と思うのも縁ができたように嬉しくなる。このアットホーム感が心地よい。

次に印象に残っているのは小さい教室の語学の講義である。私の受講した中国語は富士見坂校舎であったこともあり、まるで中学や高校の授業のようで懐かしく感じた。指名されて黒板に答えを書きに行くという形式の講義であったことも、中学や高校の授業を彷彿とさせた。

このような講義は学生同士が関わることも多く、友人になることができる点で気に入っている。普段、あまり関わらないような活発なタイプの人と話すことで、自分も何かははじめよう、と刺激を受けることができた。

最後に大教室で行われる基礎科目の講義だ。55・58年館の現在ではもう使用されていない教室で行われていた講義が多かった。私が大学に入学する前に想像していた、いわゆる「大学の講義」はこの55・58年館の大教室で行われるものであった。

学生が木製の大きな教室にひしめきあっていて、レジュメで講義が進む。講義によって差はあるが、学生が自分の考えを発表し、それについてまた学生が別の意見を述べるといったものもあった。私は自ら発表するのは苦手であるが、人の意見を聞くのは好きだ。そのためさまざまな意見に触れることができ、毎回興味深く感じた。

私が入学以前に抱いていたイメージとは異なる講義も多く、雰囲気もそれぞれ異なっている。校舎によってもさまざまであり、私はこの法政大学市ヶ谷キャンパスで4年間学ぶことができてよかった。これを読んでいる方にもぜひ、楽しめる講義を受講してほしい。



「STU+PROF=CREATION」

匿名

朝、駅のホームでは発車メロディーが鳴り終わろうとする中で、人々は押し合いへし合いしながら、缶詰のようにぎゅうぎゅうに通勤電車に詰め込まれる。駅から外へ出ると、生い茂る木々が軒を連ねて大学までの道のりを導く。枝葉は幹からの力と風の力の間で、時に大きく、時に小さく揺らぎながら自分のあるべき場所へ身体をとどめようとする。

ふと見上げると、緑色の空から差し込む陽、青いまだら模様が見界を包み込む。それが途絶えると、途端に近代的なビルが目飛び込む。

これが、法政大学だ。

朝の通学という闘いを終え、疲弊した学生達は講義室へ向かい、おのおの好きな席へ、たいていは隣の人と間隔を空けて、まだら模様のように教室を埋めていく。講義が始まると、機械のようにスマホをいじり、無表情だった学生の顔が色づき始め、教室に生命が宿る。

講義を受けていると、自分が教授と対の関係であるかのように思う時がある。自分の好奇心が高まれば高まるほど、顕微鏡で拡大したかのようにその存在が大きく目の前に現れ、好奇心が失われるほど、教授の姿はピントがずれていくようにぼやけてどこかへ行ってしまふ。

少なくとも、生徒はこの対の関係にいる感覚を持っているように思う。そして対と対が合わさって、一つの教室の雰囲気が成り立つのだ。

しかし、どんな授業であってもある共通点を持っている。それは自主的に発言する生徒が少ないということだ。たしかに、ラクタン(楽単)という言葉が合言葉のような世界で、自ら発言し、積極的に授業に取り組むのは億劫になるのかもしれない。また、発言をして注目を浴びることや間違えることに恐れを抱くかもしれない。皆、発言を求められていることは理解している。しかし、それをする勇気が出ないのだ。そんな時、とある授業で教授がマイクを学生に渡した。ただそれだけで、学生はぼやけた視界を勉学のみにピントを合わせる事ができるのだと悟った。

私は学生の授業に対する好奇心はもちろん、教授の生徒への歩み寄りも必要なのではないかと考える。大学は機械的に情報を脳内にコピーする場ではなく、学生、そして教授共に思考の相互作用によって新たな知の産物を心の中に創造することなのではないか。

物質的にみれば、教室には先生と生徒そしてその間には希薄な空気が漂っているだけである。しかし、我々は考えるという能力を持ち合わせており、科学的に希薄な空間であっても、私たちは濃密な時間をつくる事ができるのだ。

大学生活というモトリアムの中で、学生は常に様々な選択を迫られ、枝葉のように揺れている。中には、思考することを諦め、挑戦を恐れる者もいるだろう。そんな時、学生や、教授、学生センター職員が結果に関わらず挑戦する姿勢を称え、相談に乗ってくれるような環境をさらにつくり、そして、その環境を示すような掲示物が学内にたくさんあれば学生は内に秘めたる可能性を確実なものにできるのではないか。

空気のような希薄な世界から濃密な知の集合体へと化学反応を起こすには、基盤となる周囲の環境の整備がさらに必要そうだ。